

幕末における国民意識と民衆

一 国民意識をめぐって

近世の幕藩体制社会が、厳密な意味で近世的国家であったかは疑わしい。鎖国という政策そのものが、国家としての資質を失わせるようになかたちで進行し、幕藩体制は国家としての努力を放棄することによって、単なる統治組織としての政治機構をつくりあげていたのではなかったか。たとえば、海防という全日本のかつ対外的できごとを考えないということ前提にして成立していたのが幕藩制ではなかったか。

日本が世界的な流れのなかで、近代的な国民国家を形成しなければならなくなったとき、最大の問題は国民的統合と国家的独立をうちたてるべき母体がなかったということである。外圧によって四分五裂する政治勢力があったのみである。

近代的国民国家の形成において、国民意識は不可欠の要素である。国民的ない体意識を醸成するような政治的契機は、幕藩制のなかには存在しなかった。むしろ、国民意識を形成する要因は、幕藩制の解体やそれとの対決のなかから生まれでてくる性格をもっていた。

丸山真男氏は「国民主義の「前期的」形成」¹⁾のなかで、「国民」と「国民主義」について、次のように述べている。「国民とは国民たる

* 鎌田道隆

うとするものである、といはれる。単に一つの国家的共同体に所属し、共通の政治的制度を上に乗っているといふ客観的事実は未だ以て近代の意味に於ける「国民」を成立せしめるには足りない。そこにあるのはただか人民乃至は国家所属員であって「国民」(nation)ではない。それが「国民」となるためには、さうした共属性が彼等自らによって積極的に意欲され、或は少くも望ましきものとして意識されてゐなければならぬ。換言すれば、一定の集団の成員が他の国民と区別されたる特定の国民として相互の共通の特性を意識し、多少ともその一体性を守り立てて行かうとする意欲を持つ限りに於て、はじめてそこに「国民」の存在を語ることが出来るのである」と、そして「かくして国民意識は苟もそれが自覚的なる限り、早晚政治的ない体意識にまで凝集するに至る。近代的国民国家を擔ふものはまさにこの意味に於ける国民意識にはかならない」とも述べている。このような国民意識を背景として成長するところの国民的統一と国家的独立の主張とをひろく国民主義とよぶのだとも記し、国民意識を基盤とする国民主義こそが、近代国家存立の精神的基盤であるとしている。

丸山氏は、日本における国民主義は明治維新によって出発点に立つたが、その「前期的」形成は江戸時代にみられたとし、その具体的な

* 史学研究室(昭和62年9月30日受理)

展開を、十八世紀末の海防論から富国強兵論、そして尊主攘夷論へと
いう歴史的な流れのなかにみようとす。すなわち、海防論における
「挙国的関心」、富国強兵論における「中央集権的絶対主義的色彩を
帯びた国家体制の構想」とに注目し、その政治的な実現としての討
幕論へと移行する尊皇攘夷論というかたちで整理している。

たしかに、政治思想の流れとしては、このような理解の仕方も可能
かもしれないが、近代的な国民意識の形成は、特定のすぐれた知識人
としての思想家の頭のなかにいて進行しただけではなく、民衆的な
世界においてもあったのではないか、むしろ民衆の視座のなかにこそ、
近代を準備する国民意識が形成されていたのではないかと思う。

幕末には、さまざまな情報がそれまでとは比較にならない規模で民
衆をまきこみながら増加した。民衆と情報が密接なかわり方をもつ
ことによって、その量的な急増があったとみてよい。その民衆と情報
とのかわり方のなかに、国民意識の出発点もあったのではないだろ
うか。

本稿では、小寺玉晁⁽³⁾らによって収集された幕末期の諸情報を分析す
る手法をとりながら、洪水のようにあふれる情報のなかにあらわれる
政治的存在としての民衆について、その様態をまず究明する。ついで、
それらの情報を提供する提供主体の考察から、民衆の視座と国民意識
とのかわり方について関説する。そして、民衆的な国民意識の構造を
考察することによって、それが単なる排外主義とは無縁なものであり、
国民的な統一を前提とした国家的独立をめざす、愛国愛民的な国民意
識であったことを論証する。

二 政治的存在としての民衆

幕末維新の動乱期に、民衆は政治的存在となった。政治とはおよそ

無縁の存在として位置づけられ、政治的関心をいざくことさえ禁止さ
れてきた江戸時代の民衆の歴史を考えると、注目すべき事態といえ
るだろう。民衆はなぜ幕末期に政治的存在となったのか、またどのよ
うなかたちで政治的存在へと転身したのか、そしてどのような意味に
おける政治的存在であったのか、若干の整理を試みてみよう。

政治のあり方がかわったのは、やはり嘉永六年（一八五三）のペリー
来航以後であろう。嘉永六年をあらわす「癸丑」という干支を用いた
「癸丑以来」という言葉が、世の中の大きなかわり目という意味で、
幕末維新の識者たちの間では好んで用いられている。それはペリー来
航が日本人の政治観にとって、強烈なショックであったことと深く関
係している。

アメリカ大統領フィルモアの国書をたずさえてペリーが日本に来航
したとき、ペリーは国書を日本の誰に渡すべきかわからなかったし、
応接にあたった日本の役人もアメリカ大統領の国書というものを、誰
がうけとるべきであるのかわからなかったが、その事実こそ大問題で
あった。国家として対外的に日本を代表するものがないということ
は、日本が国家としてなりたっていないことを意味する。

これまでの日本における政治が、国民的統一や国家的独立とは無関
係であったことが明らかになったとき、先覚者たちは危機感をいだき、
政治観が変質した。従来の国民をいかに統治するかのみを課題とする
政治から、新しい統一国家日本をいかに建設していくかを課題とする
政治への変質を余儀なくさせたのである。新しい政治をめぐる議論と
実力闘争が幕末史では展開することとなる。ここに民衆が政治的存在
として浮上する要因があった。

政治的存在としての民衆のあり方には、いくつかのパターンが考え
られる。まずその第一は、為政者の側が政治動向の決定要因として民

衆を意識するというかたちである。もちろんこれには政治的環境によって、さらにかくつかのパターンを考へることが出来る。すなわち一定の政治状況のなかで、自らの政治姿勢や政治的決断を民衆に対して宣告ないし布告するかたちから、民衆に了解や理解を求めると、民衆の支持を得ようとするかたち、民衆からの支援や応援を得ようとするかたちなどが考へられる。政治的環境がやや安定しているなら宣告・布告型、政治状況が不安定であればあるほど、民衆の支援を期待するというかたちでの民衆の位置づけが強くなることはいうまでもない。戊辰戦争期における新政府側の布告には、じつによくそれがあらわれている。

つぎに、政治の季節には民衆の政治的意識とはかわりなくとも、民衆の日常的動向が政治的に問われるというかたちが存在する。たとえば文久三年（一八六三）七月二十四日に京都三条大橋畔に死体をさらわれた貿易商八幡屋宇兵衛の事例もそれである。「東西紀聞」に収められた死体近くの捨札によると、「近年幕府私ニ交易相許以来、一己之利潤を貪、為銅鉄蠟絹糸油塩等を初、其外右様之諸品買ハ横濱長崎江積下し、夷賊共江相渡候付、物価益騰貴し万民困苦ニ不堪」といった理由で生命まで奪われたのである。文久三年九月付の「採樵録」所収の「江戸姦商共罪名肆之事」もほぼ同様である。すなわち「交易渡世之奸商大黒屋六兵衛伊勢屋平作中条瀬兵衛本町伝馬町堀留伊勢丁通其外之者とも、国益有用之品外夷へ渡し物価高直に相成、億兆之人民之難義を不厭一己之利潤に迷ひ、居家結構或は家族を引具し物見遊山芝居見物善美を盡し奢増長いたし候段、不届至極ニ付不日に家族に至迄可加天誅也」と、商人としての私的な日常的な営みが政治的な意味を客観的にもつとされている。

このように日常的な生き方が政治的に問われるということになれば、

民衆は政治的な動向に無関心ではいられない。幕末にいたって、聞書、見聞書、秘録、雑記などと称される政治や世相に関する記録が、民間において急速に出現してくるのは、このことを反映している。その内容は、外国船の渡来に関するものから政変や天誅・暗殺、政治的な風刺のきいた俗語など雑多であるが、民衆が深い関心をよせていたことはたしかである。京都市街の南端に接する東塩小路村の要助は、洛中のさらし者のうわさを聞くと、出かけて行って捨札の文面を写し、自分の日記に丹念に書きとどめている。また、小寺玉晁の蒐集した「丁卯雑拾録」のなかに「右大秘見聞実録、白雲堂古渡ニ之蔵書たりし。此双紙八同人京師ニ而全部六冊価五両金ニ而求めし旨語りき。誰人の綴りしと云事を知らず。今爰ニ頭ハす条ハ天誅張紙の巻序文並凡例目錄丈ケを写、紙数六十一丁竹紙を以綴りぬ。跡の五冊ハ如何と尋問るニ、京師ニ而類焼の砌ともニ焼亡せしと云、さんねん、（10）」という記述があり、こうした記録が売買されたりすることがあったことを知ることが出来る。この場合、かならずしも、切迫した緊張関係をともなう情報との接触というよりも、政治的情報を楽しむ庶民像というか、興味の対象としての政治への関心をうかがうことができる。

民衆の政治への関心がさらに進むと、主体的な政治運動への参加という事態もでてくる。たとえば京都嵯峨の材木商でありながら、長州藩との密接な関係をもって、ついには家財をなげうって政治活動に奔走した福田理兵衛、同じく京都西郊川島村の庄屋役を勤めながら、学問好きから梅田雲浜や長州藩の志士たちとの結びつきを強めて尊王攘夷運動に飛びこみ、たびたび幕府方の探索をうけて逃亡生活を余儀なくされた山口薫二郎がいる。また、民衆のために民衆が主体的に組織した民衆的な農兵隊の事例もある。

ともかく、かたちはさまざまであるけれども、政治を考へるときに

何らかのかたちで民衆がからんでいることに注目したい。このことは、ちよぼくれや戯文などのかたちをとって政治が語られるという世相にもよくあらわれている。たとえば、『採襪録』に収められた「都下流布戯文之事」も一例である。

ゆかたの相談 常衣 襖衣音近し

なあおかあさんゆかたがほしいから何にしたらよかるかなあ
薩摩上布よ

上布は一昨年高ふ出して買て見たら此比大分垢付たから中川へ持て居て洗ふたら色もさめるし地合も弱そふで一向常衣には中々ならぬよ

そんならかゝ絹でなんぞ染たらどうであらふな

さあ光琳菊と二葉葵とがいゝ模様迷ふた思案して見るとあちらへひつつ付心わるそふで是も常衣になりそふにはない

(此處脱あるへし猶尋ぬへし)

強そふで常衣によさそふなけれど何分丈がない

それなら久留米じまはどうじゃなあ

ありや色もよし随分強そふでよけれど幅がせまいから手がのばされぬで常衣にはしにくい

そんなら色もよふてがらもようて絹糸の光もありて地性も強ふて常衣にもなりて世間の人気にも合のは長州より外にないわいなあ
それなら夫にきめて早く登して常衣にしてもらひたい

衣類としての常衣と攘夷とをかけ言葉にして政局に言及したものであるが、母と娘という女性同士の仕かけになっていくところは秀逸である。こうした民衆の評判の形式をかりた政治風刺の手法がさらに転回すると、素朴な民衆の言辭や行動に特別な政治的意味を見いだそうとする動きもでてくる。

流言童謡、オメコニカミハレヤブレタラマタハレ

説言、是討幕之辞ナリ、如何トナレバオメコハ新大樹ナリ、オハ大ナリ、メハ樹ナリ、コハ公ナリ、尊称ナリ、大樹公昨年大樹喜公承嗣是芽ナリト可謂、新大樹公、カミハ神ナリ、ハレハ張ナリ振ナリ奮ナリ、正張神威ニテ可振ナリ、ヤフレハ敗ナリ負ナリト、是正討新大樹敗者復討必可奉勢之辞ナリ、天下億兆ノ人望ニ背ク故ニ振張神威ニテ討シ、則復振張与討ナリ、必有勝利之謂ナリ、又ヘノコニカミキセヤブレタラマタキセ、是攘夷之辞ナリ、如何トナレハヘノコハ夷狄ナリ、ヘエ横通同音ナリ、エノコハ夷賊ナリ、ノハ助辞ナリ、コハ子ナリ、是夷子ナリ、正振張神威之討是ノ謂ナリ、キセハ被ナリ、実必不可疑之是攘夷ノ時ナリ

これは、小寺玉晁の蒐集になる『丁卯雜拾録』に収められたものであるが、ええじゃないかの狂乱のなかでの民衆の素朴な性的な言辭を、尊王攘夷や討幕の意味にあてようとしたものである。単なる言辭あそびとも見えるが、それ故に政治的な存在としての民衆を象徴しているとも見ることができよう。

三 情報提供者とその視座

政治的な存在としての民衆をもっと強く意識し、これを活用しようとしたのは、いわゆる幕末の志士であろう。かれらの諸活動のなかで、とりわけ顕著にそれがあらわれているのは、市中に掲示された張り札や捨て札の類である。張り札や捨て札は、どのようなときに、どのような場所に掲示され、誰から誰へというかたちをとるか、事例によりながら検討してみよう。

さきに紹介した文久三年七月二十四日付の貿易商八幡屋宇兵衛殺害の捨て札は、往來のにぎやかな高札場近くの三条大橋畔に建てられて

いた。文面には、三条通東洞院西入丁子屋吟三郎、室町通姉小路下ル布屋彦太郎、同居同人父市次郎、仏光寺高倉西入八幡屋宇兵衛、葎屋町一条下ル大坂屋庄兵衛らは、外国貿易にかかわって利潤を貪り、万民の苦しみを省みない悪徳商人であり、「天下億輩代加誅戮令梟首者也」と殺害の理由をのべ、なお、八幡屋宇兵衛以外の逃亡した丁子屋吟三郎、布屋彦太郎、同父市次郎、大坂屋庄兵衛らには「追而可加誅戮もの」であること、またこれら悪徳商人から金銀を借用していたものはいっさい返済におよばない、もし返済について奉行所の役人たちが面倒なことを申したらその役人の名前を記して、三条橋、四条橋に張紙して知らせよ、そうしたら早速その役人どもを成敗してやる旨書かれていた。¹⁵⁾

これは、明らかな警告とみせしめの暗殺・梟首・捨て札であるとともに、民衆への政治的主義主張のアピールであり、借金の帳消し宣伝からは、民衆側からの支持についての期待と願望もうかがえるようである。ところがこの一件には後日談がつづく。

八幡岳宇兵衛の梟首があつてから二、三日を経過した七月二十六、七日ころ、三条橋と四条橋に張紙が出た。それは逃亡して暗殺を警告されていた布屋彦太郎の手代たちが張り出したというかたちをとったもので、主人の彦太郎はすっかり改心して「御国恩」に報いたいということであるから赦免していただきたいという、暗殺者グループへの嘆願書であつた。¹⁶⁾この願書に対しては、早速室町通姉小路の辻にある木戸につるした木札というかたちで回答があつた。室町通姉小路下ル町は、布屋彦太郎の住所である。この木札の「申渡」と題された文面は、「右之者歎願之趣彦太郎義弥以改心いたし御国恩報し候義二者候得共是程之大罪を発し候者之義容易ニ□間敷筋ニ候得共相考追而可及沙汰者也」となつていた。¹⁷⁾これらの張紙や木札が、当事者たちの手

になるものであるかどうかは判断できない。しかし、単なるあそびとは異なつた緊張感がこれらを写しとる民衆の側にはあつたに違いない。

張り紙や捨て札は、政治的に意図が強ければ強いほど、多くの人に読まれることが必要である。なるべく往來のにぎやかなところ、人々の多く集まるところが、それらの掲示の場所として選ばれることになる。しかし、運動主体の公表がはばかれる政治情勢のもとでは、隠密裡にその掲示行動を行なう必要がある。なかんづく暗殺や梟首にもなう捨て札の場合、死体や首級の持ち運びはなお困難であるから、繁華な地への掲出をねらつたとしても、容易ではない。捨て札の場合、死体のすぐ近くであることが条件となるから、暗殺地点付近が圧倒的に多いといえよう。

張り紙の場合は捨て札ほど困難な条件はないので、なるべく効果的な場所が選定されることになる。『丁卯雜拾録』所収の「大秘見聞実録天誅之巻」の「張紙目録」には次のように記されている。¹⁸⁾

- 一 安政五年六月江戸浅草なミ木町江張紙之事
- 一 文久二戊辰四月万屋甚兵衛方江浪人無心之事
- 一 同月千種殿張紙之事
- 一 同年十二月京寺町善長寺江建札之事
- 一 文久三癸亥年正月寺町了生院伊達遠江守との旅宿江張紙之事
- 一 同年三月頃か大津宿江張紙之事
- 一 同年四月三条大橋江恐多キ張紙之事
- 一 同年五月江戸新両替町江張紙之事
- 一 同年七月京祇園御旅所江張紙之事
- 一 同年八月大津宿問屋場江浪士より差出候書付之事
- 一 右同日三条大橋江張紙之事

一同月大坂難波橋江張紙之事

一同月三条大橋西詰瑞泉寺江張紙之事

一同月禁中江張紙之事

一同月祇園西門江張紙之事

以上わずか十五件の張り紙しかこの「目録」はあげていないが、京都では三条大橋や祇園社が多い。京都祇園に掲示された張り紙の二、三例をみてみると、文久三年八月二十一日に祇園社西之表門に掲出されたものは、京都守護職である松平肥後守に対して天誅を加えるべきの大罪人であるとしたものであった。同年九月十六日朝祇園社南門西手筋壁に張り出されたものは「文字之太さ一字二寸余に認め手跡見事にして二間半程」の大きなものであったといい、大和国での反乱をめぐって日本人同志が争うことの非を唱え、日本人意識の大切さを説いたものであるが、内容についてはのちにあらためて言及する。同じく文久三年で、八月十八日の政変後であるが月日不明の中川宮を糾弾する張り紙も祇園社境内に掲示されたという。八月十八日の政変は公武合体派の会津や薩摩が手をにぎって、中川宮らとはかって朝議を一変させて尊攘派である長州藩の影響力を京都から払拭した政治的陰謀であるが、その中川宮を糾弾する張り紙が祇園社に掲示されたところ、折りしも祇園社に結めていた薩摩藩士によってすぐにはがされ、写し取る側からすれば、十分な時間がなかったという。

これらの張り紙にはいずれも発信人の氏名とか団体名はなく、もちろん宛所もない。発信者や宛名がなくても充分意志は通じたのである。うが、張り紙のなかには発信者の書かれているものも少くない。もちろん、仮名や勝手な標榜であるが、何らかの意味がこめられていると思われるので、若干紹介してみる。

張り紙ではないが安政五年（一八五八）七月の落し文写という幕府

の開港策や上納金政策批判の書は、発信者が「京都町人一同より」で宛所が「御所様御一門様・三中正久徳各様」となっている。この落し文は、相つぐ上納金に強い不満をもっているということとともに、異国船対策について「大名衆之御世話ニ不相成候共京都町人其外五畿内之雜人共被仰付候得者」と、民衆による防衛を主張している点において、他の張り紙に多くみられる志士の立場と若干異なっている。

文久三年十一月二日付の江戸における「唐物売買」の禁止を宣告した張り紙は、発信者が「報国雄士」で、宛所は付言から「唐物店主人共」であることがわかる。文久四年二月一日の朝「四条橋東側南側籠前ニ有之建札之上江杉九寸巾計板を釘ニ而打書認有之候文章」は、新徴組の横暴や非道ぶりを取締りかつこれら奸吏に荷担するものは厳科に行なうと宣告しており、発信者は「五畿七道貳萬八人盟士」と記している。同月十三日に京都「柳馬場四條上ル寺町松原上ル浄国寺高□ニ張」られていた島津三郎久光の罪状書は、発信者が「有志者」であった。

文久四年二月二十日に元治改元があったがその二日後の元治元年二月二十二日夜の三条橋際の張訴は、尊王攘夷論の立場から開港政策や八月十八日の政変および討長計画等について十カ条にわたって論及したもので、天下人民に訴えるべく揭示を決定したとのべているが、発信者は単に「有志中」となっている。同年三月十二日朝「寺町二条下ル中程之家之軒」にあった張り紙は、將軍家茂の上洛によって何ら英断なく世上はますます混乱し、中川宮や島津久光らの陰謀が進められているようだという情報を「天下之御役人」に知らせるために記したとあり、発信者は「皇国脱民」となっている。同年六月八日朝の五条橋の張り紙は、攘夷派として一橋中納言慶喜の奸計を許さず、近いうちに一橋はじめ幕賊どもに天誅を加えるであろうと宣言しており、

発信者は「誠義雄士」であった。慶応三年八月十二日朝の三条通寺町角の張り紙は、「有志武士」が出したものである。内容は私欲のために物価をつりあげた奸商に対して、張り紙によって警告を出しておいたら近ごろ米価が少しづつ下がってきたが、さらに他の物価も下げるようつとめるべきであり、もし賈^メ等の理不尽な商いをするものがあったら錦天神の門前へ遠慮なく申し出よ、そうすれば探索の上天誅を加えるであろうというものであり、なおこの書付は三日間張っておくようにと付言してあった。

「雄士」や「有志」などの表現が多いのは、当時の流行であったかもしれないが、単なる張り紙ではなく梟首の捨て札の場合には「義士」といった表現がたびたびみられる。

元治元年五月六日、大坂の「難波御堂前石燈籠火袋之中ニ坊主之首」があったが、これは捨て札によると大和国丹波市の路上で天誅にあって岡田式部の首であり、捨て札の発信者は「正義士」となっていた。同年五月二十一日、京都四条御旅所妙見宮傍の捨て札は大坂天神橋上で天誅にあって松平大隅守内組与力「内山彦四郎」に関するもので、発信名は「天下義勇士」であった。同年七月十一日京都三条橋にあって捨て札は、三条木屋町で天誅された佐久間象山についてののものであり、発信名は「皇国忠義士」と記されていた。

「有志」や「義士」と自称することが流行ではあったとしても、何らかの意味がこめられていたはずである。「有志」の定義に関して、『甲子雑録』に収められた「文久三年八月七日江戸日本橋中擬宝珠ニ結付有之を番人今七日朝六ツ時見出為知候間御届相成」った「諷諫状」の本文中に閑説した部分がある。

一或ハ攘夷之説を主張し国家之事を議し候有志与称する者を召捕、刑戮に処し而夫ニ而攘夷不致共太平ニ可治杯与申者有之、可笑

之甚敷事ニ候、夫有志と申族ハ己か自家を不顧只管国家之為に尽力いたし候者共ニ而、誠ニ神妙之正氣と可申難有人々也³⁴⁾

有志とは、「自家を不顧、只管国家之為に尽力いたし候者共」と規定しているわけであるが、天下国家のゆくすえを憂え、思う気持が大切なのである。同じ「諷諫状」のなかに「廟堂議論之次第、我々天眼通を得しにもあらされども、誠以御国を思ふ眼力ニハ逐一相知れ申候³⁵⁾」という一節があり、また「天下之御政務ハ公通とありて、億萬人へ知られても恥からぬ御所置社願わしけれ³⁶⁾」とも述べられている。天下国家の政治は公明正大でなければならないし、たとえ隠そうとしても国家の視点に立つ者は、天眼通のように問題を看破できるものであるという。

それでは、どのような「御国」意識に立てば、天眼通を得られたのであろうか。国民としての自覚はどのようなかたちをとってあらわれたのであろうか。国民意識の構造をみてみることにしよう。

四 国民意識の自覚と構造

一般民衆の間に日本という国家意識や国民という自覚が、どのようにして生まれでてくるのかというメカニズムは明らかでないが、民衆が政治的存在となることと無関係ではないであろう。政治的存在としての民衆をもっとも強く意識する觀念のうちに、「御国」意識・日本意識があらわれていることがその一証左である。

そして、その「日本」意識の直接的な契機が、外国勢力の日本への進出すなわち外圧であるということに関しては大方の見解が一致しているところである。とりあえず、外圧がなぜ日本の政治的危機という認識と結びついているのかというところから分析してみよう。

ペリー来航後の外国との接触が、いずれも貿易交渉史としての方向

をもつことは、ヨーロッパ資本主義烈強のアジア進出という世界的な状況から当然である。したがって、経済的に立ち遅れている日本が開港・貿易によって大きな影響をうけることもうなづける。さきにみた奸商暗殺の捨て札の文面は、いずれも外国貿易によって日本の「万民」が苦しまざるを得ず、一部の商人のみが私利を貪るとあった。貿易による日本国内の経済的混乱と損失が、攘夷という排外思想の誕生と展開の根底にあったことは容易に想像できる。

経済的要因以外にも、外国を忌避する要因はあった。典型的には「天子ハ皇統連綿として四海之君ニ被為渡、天照皇大神之御子孫なる事、今更申上迄も無之、是神州之萬国ニ冠たる所」というような国家的な神国意識がそうである。このような神国意識には、日本は純粹でもっともすぐれた国であるという価値観があり、外国人が混住することによって、日本の風俗や気風が外国風になることへの、強い抵抗意識がある。慶応三年六月の書簡という書き物の一部に、江戸・横浜の「夷国化」ぶりが伝えられているので紹介しておこう。

一此表（江戸：筆者注）先穩ニ御座候へ共、昨年比申上置候夷人風ニ押移リ之儀、当正月より日々相増、殊ニ坊主御座候ニ相成、久々長髪直キ被髪と相成、又は当春崩御ニ付長髪引統惣髪之者多、傘も晴雨共夷人之傘沓を履歩行仕候、俗ニ日本唐人と称へ申候、右躰之者市中七分通行仕候、尤皆侍人ニ而農商等ニは無之、併彼傘ハ商人ニも相見へ申候、△——ロウ引の切也、同じ筒袖ニもレキシヨと申は僧衣の如くひだ御座候、刀も帯し候へ共皆革ニ而肩より腰へけさニそり申候、日本ニは管仲無之候やと奉存候、比日親族共病氣ニ而内々金沢辺江相趣候処、横浜不相替繁昌、日々夷人共大勢ニ而金沢辺騎して遊覧仕候、既ニ金沢瀬戸と申景色宜敷地ニ酒樓を建、夷人之遊所ニ致し扇屋と呼、

日本人ハ登り不申候、日本語を覚へ酒樓之妓婦等ニ対しアナタアナタと申候、別れニサヨナラと申候、馬は何れも長大に御座候、先ハ横浜辺夷国ニ相成申候、此辺魚類を初として野菜物其外米穀ニ至る迄江戸より高価、併下輩之者渡世も宜敷哉余り難渋の軀も相見不申候、往来茶亭杯の様子も昔より繁昌ニ而暮し能杯と申候、随而奢侈ニ相成衣類を初履物等ニ至迄法外ニ番奢ニ相成、其日稼之漁家の婦人共髪結ニ髪結セ申候様子、世の中之変化ニはあきれ申候、人氣ハ益悪敷金沢辺塩浜年々広く相成、気色大ニ損申候。

経済的な混乱や風俗等の欧化に対する反発が排外的な思想や行動に結びつきやすいことはいまでもないが、排外的な思想はそのまま国民主義的な意識へと直結するものでもない。また、誤まった価値判断からも、健全な国民意識は生まれないであろう。

誤まった神国意識や世界交易観について、『甲子雜録』所収の「藤渠漫筆」には、するどい批判が述べられている。まず神国意識について、「日本を神国と称して神風を頼むなとハ誤也、日本ニ神あれハ異国ニも神あり、神とハ日本を開闢し給へる御先祖を神と崇め祭る也、銘々の先祖も神也、近頃仏法渡りてより仏と心得るハ大なる誤也、昔ハ神今ハ仏といふ理ハなき筈也、日本計神国と称するハウヌボレなるへし、併し日本ハ美風の有国故唐人も君主国と称し、又和蘭の人も鎖国論ニ義ニよりて切腹する事を甚た賞美せり」と、かなり客観的な見解をもっている。また風俗の欧化批判に関して、「近来異国人来るニ付動モすれハ衣服など異国の風ニ移るゆへ、筒袴綿袴も異国の風ニならざる様ニ心得製すへしと仰出されたり、至極御尤の事也、併ながら日本ニ仏法渡りてより僧か衣を著て家も道具も皆天竺風ニ造り、彼の大札の葬式まで天竺の案銅鑼メウハツを敲て吊ふなり、これ第一夷

狄を学ぶ悪風俗なれども久々仕来りたる故ニ、諸人心付さる也⁽⁴²⁾と、外国の風俗であっても、日本の風俗として同化してしまつて、気づかないものもすでに存在しているのだという歴史的認識を示している。また、貿易にともなう物価問題について、「異ハ来り交易初りてより米高直ニなり、諸人難波いたす様ニ心得る人多き故ニ、兎角異人を悪ミ打払の説を喜ぶもの多し⁽⁴³⁾」と、外国との交易と攘夷との関係が密であることを指摘しながら、「近來交易初めてより藥品第一下直となり甚喜ふへし⁽⁴⁴⁾」とか「絹物高直ニ成たれども是も蚕を多くかへハ追付安価なるへし⁽⁴⁵⁾」と、外国交易には利点もあり、また国内の努力次第で解決する問題もあるのであり、外国交易を頭から否定する議論には反論している。

そして、何よりも世界情勢を見なければならぬとして、次のようにべている。

日本ハ世界の絵図ニて視れハ、樽指程もなき小国にて、彼のヨウロッパ州の大国ニ対し、打払など豊の上ニてハ何とでも論すへけれど、先打払が出来ぬか能々考へたる上ニて論すへき也、清の大国さへ林則除と云へる英傑有て一旦阿片烟焼き異人を追退けたる所、英吉利大ニ怒り数十艘の軍艦を以て襲来り、流石の大国も敗北くし、天子も都を落られ金を数十万出して和睦を乞たり、よき手本とすへし、又唐ハ弱し日本ハ武の国など、ウヌボレを云人あれども、唐も全弱きニもあらず、又馬鹿計ニてもなし、(中略)元來世界中交易を初めて万国付合をせぬ処ハなき様ニなりたる也、然ニ日本計付合をせぬ故ニ、外国より付合せ度思ふ所へ、亜米利加のペルリ一番大功を立んと欲して、軍艦を以て来り強て書翰を呈し和親交易を願ひたり、(中略)日本許小国ニて付合なきゆへ、付合ハせずてハおかぬなるへし、仮令付合を為した

りとも礼儀を厚くし、且彼国ニ侮られぬ様ニ仁政を施し、人心一致して台場を製し土城を築き、鉄砲大火及び軍艦を多く製造し、坊主乞食等の遊民を減し、富国強兵の工夫をなし、琉球朝鮮蝦夷羅刹迄も属国ニなし、段々国を広くし外国と付合する時ハ、外国も畏るゝに足らず⁽⁴⁶⁾

この「藤渠漫筆」の筆者は、かなりな知識人であろう。排外的な攘夷思想ではなく、世界情勢のたしかな把握から、外国と競合していける国づくりが大切であることを批歴している。知識人としての到達点を示す論調であるが、「人心一致して」富国強兵をめざすべきであるという点に注目したい。国民的統一が富国強兵の前提であることを看破しているのである。

これは、国論の不統一、国内戦争さえ惹起している日本の現実を直視した議論である。国内における為政者間の政権争いについては、『甲子雜録』所収の「諷諫状」も「或は外夷之力を借り薩長を征んたと議する者有之、是実ニ禽獸にたも劣し了簡と可申、先得と勘考して見られよ、薩摩も長門もアメリカイキリスでも有之間鋪、矢張日本之地也、(中略)外夷ニ討する杯とハ、自分其身の肉を喰ふよりも甚し⁽⁴⁷⁾」と、国内における日本人同志の戦争を批判し、まして外国の力に頼って国内の争いに結着をつけることを厳しく拒否している。そして、日本人同志の争いによって「天下万民ニ被見放候ては、如何様ニ茂救方有之間敷⁽⁴⁸⁾」と、民衆に見はなされるようになったら、救いようがないのだと嘆いている。

「天下万民ニ被見放」ということは、天下万民のことを考えない結果である。国民のこと、国土のことを考えない国家観が、民衆から見はなされるのである。国民や国土を分断するような考えこそ、非民衆的なのだといえよう。たとえば、さきにみた文久三年九月の祇園社南

門の張り札にも「此度大和の国の義兵を討んか為発向、実に日本に生て日本人に非ず」と日本人同志の争いを拒否する姿勢がみえ、「日本之人心一致之上は、萬里之風波を凌ぎ夷国に渡日本之武威をか、やかし」と、強烈な日本意識の背景に国民的統一が必須であることが断じられている。同じ日本の土地、同じ日本人という意識が、民衆的な国民意識の前提であることを示しているのである。

同じ日本の土地、同じ日本人という考え方を前提とすれば、何藩とか何領といった地域的区別や身分的差別を第一義的とする考え方は成立しない。すなわち、どここの海岸は何藩の海防地域であるとか、国土の防衛は武士の仕事であるといった考え方は成立しないのである。そして、また実際にそうした国民意識にめざめた思想が登場していた。

紀伊国田原郡田原村出身の豪商浜口梧陵は、村民を集めて嘉永四年八月に海防のため広村崇義団という農兵隊を組織したが、その趣意書には日本の土地を少しでも夷人に責めとられては日本の大恥であり、村民を守り村を守るために農民の自主的な防衛隊をつくるのだと記されていた。そして、文久三年大和天誅組の乱の鎮圧のための紀州藩からの出兵依頼に対しては、「若此辺へ被仰付候共、海岸手当夷人へ立向候事は兼て被仰付も有之、年来心得居候故、身命捨日本男子の役は勤可申覚悟に候得共、山手へ立向日本同志の取合は蒙御免候様申立の心得に御座候」と、日本人同志の争いになるという理由で、きっぱり断るつもりだとのべている。

嘉永四年六月小浜藩領内に布告されたという海防心得書および手配書は、藩側から出されたものとはいえ、まさに民衆的な国民意識に裏打ちされたものであった。

(前略) 今日に至り異国人に乱妨致され候様之事、万一有之候ては、日本国中の大なる恥にて開闢以来之人に對し候ても、末世之

人に対しても、申訳無之事に候、夫故乍恐上御一人様より下末々迄心を合せ力を合せ、此御国(日本)を守り、昔より無之恥を取不申様ニ骨折候事、第一之心得に候、去に依、他国之御他領のと申差別なく、日本国中一家内同様の心得にて、万々一異国船参り不作法を致候時は、上下男女の差別なく、命を捨て此御国を守り候心得第一之務にて候、(後略)

ここにいう異国人の乱妨とは何か、それは「上陸刈田乱妨」であり「老人子供を船に」取られることであるという。このような乱妨に対する防衛は、武士にまかせられるものではなく、上下男女の差別なく、国民が総出であたるべきだという考えである。

軍事は武士の専売特許といった身分制的な考え方が否定されているわけであるが、前に紹介しておいた安政五年七月の「京都町人一同より」という発信名をもつ「落し文写」にも、幕府当局者の腐敗ぶりをのべたあとで「此上ハ京都町人共一町限り一軒二三人ツ、罷出候へハ、凡人数ハ廿万人軍用に相叶可申ニ付、異国船凡四百艘有之候共、一艘ニ五百人余り有之候処わつか貳万人計御座候、此上ハ大名衆之御世話ニ不相成候共、京都町人其外五畿内之雜人共被仰付候得は、異国之者幾萬人参り候共安々打払可申候」と、大名・武士に依存しない町人たちによる外国防衛もあるのだと説いてみせている。

出羽国の篤農で水田開発に尽力していた渡辺斧松(一七九三〜一八五六)を中心に、外庄の危機を契機として結成された渡辺村農兵隊も、安政三年三月の隊規で、日本は全体で一つの国であることを確認したうえで、「外国の防ぎには百姓にて可致候事」と明確な国土防衛意識を、民衆の次元で自覚していることを示している。

これらの事例は、これまで軍事は武士階級の独占的管掌としてきたことよって成り立っていた身分制というものを、客観的には全く無

視し拒否している論理と解釈することができよう。しかし、そのような大層な身分制論議とはかけはなれたところに立脚した、国民的課題としての海防という認識がここにはある。海防は、誰のためでもなく、自分たちのためのものであるという認識がある。しかも、狭隘な郷土意識でもなく、国家的規模にまで視野が拡大されているところに、国民意識としての資格が十分に存する。

「刈田乱妨」や「田畑を乱妨」されることを防ぐために、そして「村内足弱に至る迄一人たりとも」また「老人子供」にいたるまで、外国のために傷つくことがあってはならないから、「一寸の土地も外国に取られ」ないように、国民としての強い自覚を民衆はもって海防を主張するにいたったのである。

しかし、自らの手で田畑を耕作して一家をやしない、老若助けあって町や村の生活をおくってきた実績があるとはいえ、何故にそれが外圧の脅威に対して、いっきょに一国的規模での国民意識を噴出させることになるのかについての論理的過程は、ほとんど明らかでない。政治的共属性や文化的一体性といった事実もそれほど明瞭でない幕末日本の民衆が、いかにして国民意識形成の素地を蓄積してきていたのか、今後の大きな研究テーマである。

ただ本稿では、幕末における民衆の政治的存在と、そこにおける民衆の視座の誕生とが、民衆的な国民意識の成立に深くかかわっているという点に論及したにすぎない。そして、民衆的な国民意識には、あるべき国家の制度や政治組織についての認識はほとんど欠如しているものの、国を支え推進するエネルギーとしての豊かさは予見できるようである。

注

- (1) 丸山真男著「日本政治思想史研究」三二二頁～三三二頁（一九五二年、東京大学出版会刊）。
- (2) 丸山真男著「日本政治思想史研究」三三八頁～三三六頁。
- (3) 小寺玉晃は名古屋の人で幕末の情報蒐集家として知られる。本稿では、玉晃のまとめた「東西評林」「甲子雜録」「丁卯雜拾録」などのほか、史談会採集の「採樓録」などを用いた。
- (4) 「米使ペリリ初テ渡来浦賀栗浜ニ於テ国書進呈一件」（続通信全覽類輯之部五修好門）昭和六十年、雄松堂出版刊）参照。ペリーの持参した大統領の書翰および米國政府の添書は、日本帝（大君主殿下、大皇帝殿下とも書く）またはその命をうけて「外国之事を御取計被成候ミニストル（執政・御老中を指候唱ニ候）の外ニハ難相渡」種類のものであることをペリーは日本側に申し入れたが、具体的に日本の誰をもって、日本帝および外国宰相にあてるべきであるかは、双方ともに判断できていない。
- (5) 慶応四年一月鳥羽伏見の戦いにつづく討幕戦争がはじまると、新政府側は、「やむ事を得させられず御追討被仰出候」とか「速ニ賊徒誅戮、万民塗炭の苦みをすくわせられ度敷慮ニ候」と自己の立場を強調しつつ、民衆への支持を求める布令をあいっいで出している。（鎌田道隆「京都と『御一新』」林屋辰三郎編「文明開化の研究」所収参照）
- (6) 日本史籍協会叢書一四二「東西紀聞」六九二頁、この捨札文面を写したものは多く、「文久秘録」（京都市歴史資料館撮影マイクロフィルム）にも見えている。
- (7) 日本史籍協会叢書一〇四「採樓録」二一六頁。
- (8) 鎌田道隆「討幕と京都町人」（京都市編「京都の歴史第七巻」所収）参照。
- (9) 「若山要助日記」（京都市歴史資料館撮影マイクロフィルム）
- (10) 日本史籍協会叢書一四〇「丁卯雜拾録」一一二頁。

- (11) 鎌田道隆「討幕と京都町人」(京都市編「京都の歴史第七巻」)参照。
 福田理兵衛(一八一五〜一八七二)は長州藩用達となって、文久三年には長州藩の天竜寺借入れを仲介し、息子の信太郎とともに物資の調達や情報の収集に奔走した。山口薫二郎(一八一五〜一八七三)も長門物産販売および山城丹波物産購入の役にたずさわり、福田理兵衛とも知り合い、尊攘運動に没頭した。
- (12) 日本史籍協会叢書一〇四「採撰録二」二六二〜二六三頁。
 (13) 日本史籍協会叢書一四一「丁卯雜拾録二」二二頁。
 (14) ここでは、便宜上一般的に主義主張を開陳した揭示物を厳密な意味での紙や板等の種類にこだわらず張り紙とし、同じく材質や形式に関係なく、内容として被暗殺者名やその罪状等を記したものを捨て札とする。
 (15) 日本史籍協会叢書一四二「東西紀聞」六九二〜六九三頁。
 (16) 日本史籍協会叢書一四二「東西紀聞」六九三頁。
 (17) 日本史籍協会叢書一四二「東西紀聞」六九四頁。
 (18) 日本史籍協会叢書一四〇「丁卯雜拾録一」一一頁〜一二頁。
 (19) 日本史籍協会叢書一〇四「採撰録二」八〇頁。
 八月廿一日祇園社西之表門に張出
- 松平肥後守
- 此者固陋頑愚不知遵奉推戴之大義矣、欲恣凶暴然力微不能遂素志、近者頼逆賊薩人之大力藩奉要朝廷逞暴威不知其実、為薩人所售愚亦甚矣、神人共に怒必可加天誅、以匡天下之大刑者也。
- (20) 日本史籍協会叢書一〇四「採撰録二」九四〜九七頁。
 (21) 日本史籍協会叢書一〇四「採撰録二」一五六〜一五八頁。
 (22) 同前。「京人伝写之奥書」に云、右は去日祇園社へ張出候、此節薩人右社に詰居候間、直様引払候由、書様・文体難分所有之写之儘書取申候也」という付書がある。
- (23) 日本史籍協会叢書一四五「東西評林二」二四〜二七頁。表題は「乍恐奉願上口上覚」というもっとも一般的な願書形式となっている。
- (24) 日本史籍協会叢書一〇四「採撰録二」一八四頁。
 我等共願天下之形勢、為神州欲救萬民窮故追々交易募歎息不忍見候、已來唐物売買之者於有之者悉正之、其奸賊急度可為打首者也。但今夜より五日之内差免し、右五日過候て用ひざるに於ては、銘々可致覚悟もの也
 文久三年十一月二日 報国雄士
 唐物店主人共へ示置者也、三日之間急度張置もの也
- (25) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」二八一〜二八二頁。
 (26) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」二三二〜二三三頁。
 (27) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一一七〜一二二頁。
 (28) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」二八八〜一八九頁。
 (29) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」五五四頁。
 (30) 日本史籍協会叢書一四〇「丁卯雜拾録一」二一七〜二一八頁。
 (31) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」には四四五〜四四六頁と四七七〜四七八頁に重出し、同叢書一〇四「採撰録二」二八二〜二八三頁にも同記事が収められている。
- (32) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」四七八〜四七九頁。
 (33) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」六四四〜六四五頁。
 (34) 日本史籍協会叢書五四「甲子雜録三」二二七頁。
 (35) 日本史籍協会叢書五四「甲子雜録三」二二五頁。
 (36) 日本史籍協会叢書五四「甲子雜録三」二二五頁。
 (37) 日本史籍協会叢書五四「甲子雜録三」二二〇頁。
 (38) 日本史籍協会叢書一四〇「丁卯雜拾録一」一三一〜一四二頁。
 (39) 日本史籍協会叢書一四〇「丁卯雜拾録一」一三一〜一三三頁。
 (40) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一三三〜一七一頁。
 (41) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一四〇〜一四二頁。
 (42) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一四六頁。
 (43) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一四四頁。

- (44) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一四一頁。
 (45) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一四一頁。
 (46) 日本史籍協会叢書五二「甲子雜録一」一四四、一四六頁。
 (47) 日本史籍協会叢書五四「甲子雜録三」一三三頁。
 (48) 日本史籍協会叢書五四「甲子雜録三」一三四頁。
 (49) 日本史籍協会叢書一〇四「採撰録二」九四頁。
 (50) 日本史籍協会叢書一〇四「採撰録二」九五頁。
 (51) 鎌田道隆「村落指導者層の歴史的意義」(日本史研究一〇三号所収) 参照。
 (52) 「浜口梧陵伝」(「浜口梧陵伝」刊行会刊) 一七九頁。
 (53) 鎌田道隆「村落指導者層の歴史的意義」(日本史研究一〇三号所収) 参照。
 (54) 盧田伊人「小浜藩の海防計画と其設備」(歴史地理六三卷五号) 引用史料。
 (55) 日本史籍協会叢書一四五「東西評林二」一六頁。
 (56) 井上清「日本現代史」明治維新」(一九五二年、東京大学出版会刊) 一四頁引用史料。

National Consciousness and Popular Classes in the Later Shogunate

Michitaka KAMADA

Summary

The awakening of national consciousness in Japan dates from the later Shogunate 幕末. It was in this period that the Western capitalist nations called for the opening of Japan.

In this article the author makes a study of the following points:

- (1) Under the pressures from abroad, there arose rapidly a deep political interest in Japan.
- (2) Those *samurais* 武士, who devoted themselves to political activities, eventually, incorporated the idea of "people" into their ideology.
- (3) At the same time, there grew up the common sentiment that there should not be any more fratricidal war among the Japanese people. And
- (4) The popular classes, the very people, also took the national consciousness that they should defend their lives and country against foreign nations by themselves.